

買い物不 便な むら が 立ち上 がる



過疎地有償運送「のってこらい」の常連、
袖木範子さん。「買い物、診療所、バス停
にと、町内の顔なじみの運転手だから気
軽に頼みやすい」

乗って残そう「のってこらい」 住民で支える地域限定「タクシー」

「三重県熊野市五郷町」

NPOの「のってこらい」が、車のサービスを始め2年。
買い物や通院などに欠かせない移動手段として、むらの暮らしに着実に根づきつつある。

文 編集部 写真 鈴木千佳



NPOの「のってこらい」代表の峪口さん（右端）と増田議員（左端）、定期的に車を利用する運動クラブメンバー。「のってこらい」とは、熊野の言葉で「乗っておいでよ」という呼びかけの意

熊野市の中心部から車で30分。熊野街道を上り、奈良県との境にある五郷町は、人口約9000人、約450世帯が住む山間地だ。2010年6月、この五郷で住民が立ち上げた「NPOの「のってこらい」が、三重県で初めての過疎地有償運送（次ページ解説）を始めた。

これは五郷町を含む熊野市の過疎地に限り、「のってこらい」の車で送り迎えをする仕組み。料金は初乗り300円で、地元タクシートの半分以上の安さ。五郷町住民で、会員登録した人なら誰でも利用できる。まるで、むらのタクシートのような存在だ。

「はい、のってこらいの峪口（きもと）さんですか？ 何時のバス？ あんまり時間ないで。外出て待つといてー」
代表の峪口祥治さん（62歳）へ、電話をかけてきたのは常連のおばあちゃん。市街地へ下りるバスに



15分後に乗りたいので、最寄りのバス停まで送ってほしい、という。事務所兼峪口さん宅へ伺ったこの日は土曜日。土日祝日は車を使える人が家にいるから、予約はあまり入らない、と言ったその側から携帯が鳴ったのだった。さっそく車に乗り、おばあちゃんの家に向かう峪口さん。「本当は前日までに予約してね、って言うてるけど、まあなかなかそうもいかんよね」と笑う。

おばあちゃんの家から最寄りのバス停まで、車で走ればほんの2〜3分。だが途中に急な坂もあり、歩くとなると容易ではない。

「膝と腰を痛くしてからは、長くはよう歩けんようになったけど、車がこうしてきてくれるから助かるわ。帰りもお願い。おおきにな」と、おばあちゃんは300円を払い、バス停で降りた。



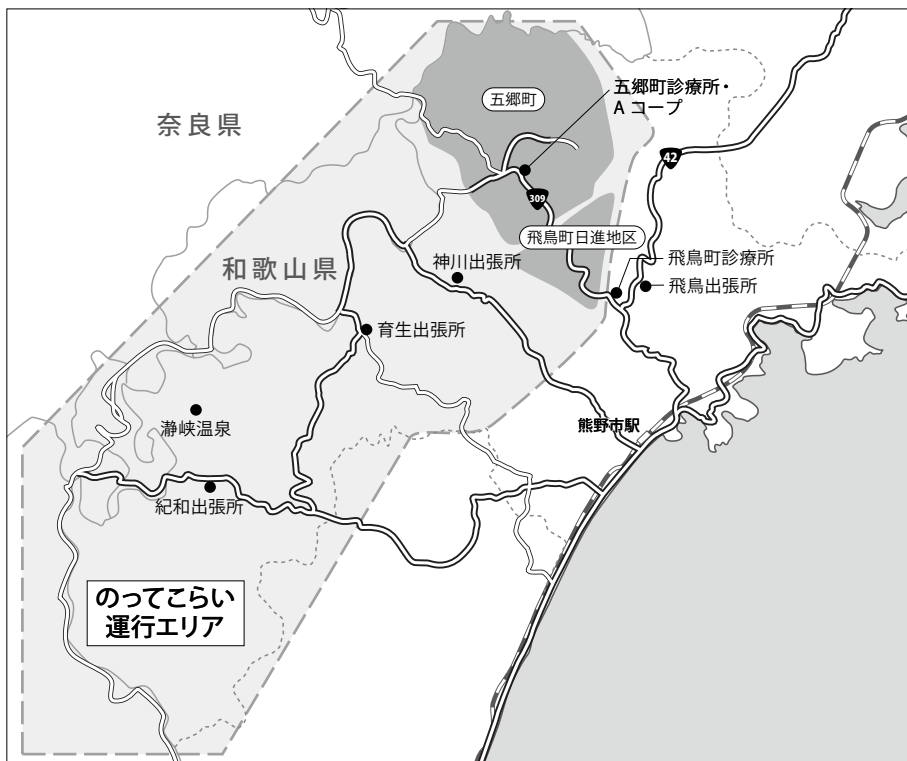
過疎地有償運送とは

道路運送法78条では、自家用車を使った有償運送が認められており、市町村運営有償旅客運送、過疎地有償運送、福祉有償運送の3種類がある。

過疎地有償運送は、公共交通機関が不十分な過疎地で、NPO法人や地方公共団体などに限って運営できる。運営協議会の合意を経て、運輸支局へ登録する（2006年より許可制から登録制となった）。当該地の登録会員が利用できる。

取り組むのは全国で70カ所。中部地方では、のってこらいのほか、静岡県で2カ所、愛知県・岐阜県で各1カ所実施され、シルバー人材センターや商工会、福祉協議会などが運営。いずれもこの10年間で始まった取り組みで、継続中である。

ほか、市町村運営有償旅客運送はコミュニティバスなどで427カ所、福祉有償運送は2480カ所で行なわれている（数字はいずれも2010年9月末現在）。



運行エリアは五郷町、神川町、育生町、紀和町の全域、および飛鳥町の日進地区（飛鳥町診療所は可）。これは市がバスの運営主体となり、バス会社に業務を委託している路線範囲にあたる（太線部分が主なバス路線）。海岸部、市街地、国道42号線沿いは対象外。会員登録は、五郷町と飛鳥町の日進地区住民のみが可。

気づいたら五郷には困っている人がたくさんいた

のってこらいの利用者はおもに車を運転しない高齢者で、町内のAコープや診療所、バス停への送迎が多い。バスは幹線を走っているが、上り・下りとも1日4本のみ。朝夕に集中していて、日中は利用しにくい。なかには週に1度しか循環しない集落もある。

家からバス停まで、400m以上離れている家は全世帯の37%、1km以上離れているのは14%に上る。市街地からタクシーを呼ぶにも時間がかかるし、市街地まで乗ると片道8000円もかかってしまう。そんなわけで、峪口さんのもとは、1日平均7〜8件、ときには20件以上の依頼がある。

じつは峪口さん自身は、五郷での買い物や移動の不便さをそれほど意識してはいたわけではない。

峪口さんは五郷で生まれ育ったが、現在自宅は市街地にあり、2009年まで布団屋を営んでいた。60歳を機に店を閉め、空き家になった五郷の実家に度々帰るようになった。そこで頻繁に顔を合わせるようになったのが、五郷の市会議員、増田幸美さん（70歳）。

「いまの五郷は大変だ。買い物や診療所にも行けん人が大勢いる。バスに頼らず、みんなが使える車が必要なんや」と、増田さんは峪口さんと会うたびに話をした。自家用登録の自動車、いわゆる白ナンバーでも、NPOを立ち上げて運輸支局に過疎地有償運送の登録をすれば、送迎サービスができるという。

「そんな儲からんこと俺はとてもやれん。どのくらい使う人がおるか分からんし」と最初は断っていた峪口さん。お前しかできるやつはおらんどと言われ、改めて五郷のあちこちを車で回り、出会った人に世間話がたら、外出するときのことを聞いてみた。

すると、バスの本数が減って思うように買い物ができなくなったおばあちゃん、離れたバス停まで歩くのがつらくなったおじいちゃん、診療所に行く場合は知り合いに頼っている人などに会い、その不便さを痛感。

「自分は運転できるし家もバス停に近いから、昔よりバスの本数が減っても、田舎だからそんなもんなんとしか思っとらんかった」
困っている人がいると放っておかず、「第二の人生として、これ